

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 31 日現在

機関番号：25406

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720019

研究課題名(和文) プラトン『メノン』の総合的研究

研究課題名(英文) A comprehensive research on Plato's Meno

研究代表者

大草 輝政 (Ohkusa, Terumasa)

県立広島大学・総合教育センター・准教授

研究者番号：10552705

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、プラトンの『メノン』の影響の再評価である。まず主要テキストの『メノン』の精査を行った。そして同書が、アリストテレス、ヘレニズム期の思想家、その他の哲学者たちにどれほど影響を及ぼしたのかを考察した。本研究の主要成果の一つは、「誰が何を想起するか」に関して、想起の正確な役割および範囲を見定めたことである。その他の成果として『メノン』の新しい邦訳と解説があり、京都大学学術出版会より刊行される予定である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to reevaluate the relevance of Plato's Meno. I firstly undertook a scrutiny of the main text, Meno. I also explored to what extent it affected Aristotle, Hellenistic thinkers, and other philosophers. One of the main results of this research was to establish the exact role and scope of recollection regarding "who recollects what". Another achievement is an updated Japanese translation and commentary on the Meno, which is set to be published by Kyoto University Press.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：知識 探求 想起 イデア論 プラトン哲学 対話篇 分析哲学 『メノン』

1. 研究開始当初の背景

国内では近年、翻訳や解説・注解をともなつた本格的な『メノン』研究はほとんど進められておらず、また海外では、プラトンの初期から中期思想への転換を示す作品として注目され、数多くの訳書・研究書・注釈書が公刊されてきたにもかかわらず、とくにここ数十年間、概ね、プラトン思想が単線的に「発展」したとの想定下に研究がなされてきた。しかし、最近ではそうした「発展」に懐疑的な解釈も出はじめている。とりわけ 1980 年代来の「ソクラテス研究」の成果が落ち着きを見せ、多様な解釈の布陣をようやく俯瞰的に見ることが可能になってきた今日、『メノン』の総合的な研究と、アイデア論、想起説、仮設法、等々の従来型解釈の見直しは、重要な課題であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、プラトン『メノン』の哲学的・思想史的な意義を明らかにすることである。とくに次のようなことに重点を置いて研究が推進される。

- (1) 『メノン』が西洋思想史において、具体的にどのように受容・批判されたかを探る。
- (2) 真理探求の方法やアイデア論を中心に、従来の（例えば、初期から中期への結節点としての、といった）『メノン』研究とは異なる角度から光を当てる。
- (3) その他『メノン』について、徳の教育や、知と思わくの問題など、さまざまな角度から総合的に研究し、諸問題間の連関を見出す。
- (4) 最新の知見を踏まえた、わかりやすい邦

訳語による翻訳公刊に向けて準備を進める。

3. 研究の方法

本研究代表者は、当該研究に関連するいくつかの研究を行ってきた。本研究はそれらの成果を踏まえて、解説・注解付きの翻訳準備を基礎作業に据えながら、つぎのように遂行される。

- (1) 古典期全体に及び『メノン』の影響や、中世、近世、現代哲学におけるその影響について、関連文献の収集を行い、受容、批判、変容の経緯をたどる。
- (2) 『メノン』のテキストそのものの精査により、そこで扱われている様々なトピックについて、内的関連を見いだす。
- (3) 想起説が明示される対話篇は『メノン』『パイドン』『パイドロス』であるが、それ以外の対話篇にも想起説が見られるという解釈の可能性を追求する。
- (4) プラトン思想に「発展」を見ようとしてきた解釈を批判的に検討し、テキストの精緻な読解によって、よりプラトン自身にそくした解釈を析出する。
- (5) プラトンの探求方法——吟味・論駁、仮設法、分割法、等々——について、それらが「発展」にともなう別々の方法であるのか、それとも同一の方法の別の呼称であるのか、それらが全体と部分の関係にあるのか等の関連を解明していく。
- (6) (1)～(5)を踏まえながら、プラトン『メノン』の現代的意義について明らかにする。

4. 研究成果

研究代表者は、つぎのような研究成果を得た。

- (1) 主に大谷大学図書館、京都大学図書館における文献収集の継続により、『メノン』の影響がいかに広範なものであるか、広範なものでありうるかが、明らかになりつつある。とくに現代のアウグスティヌスやプロティノス研究においては、最近のプラトン研究動向（例えば、プラトンが「対話」という探求方法を採用したことの意義が評価されているということ）に呼応するように、「探求の方法」や「記憶」「想起」といった切り口からの研究が見直されてもきており、古典期全体にわたり、様々な観点での影響を見届けながら、『メノン』の意義が考察されるべきである。
 - (2) プラトンの対話篇における想起説導入状況を精査し、「誰が何を想起するのか——『メノン』『パイドン』を中心に」という論考をまとめた。プラトンのいわゆる想起説について、D・スコットは、その主体や対象を極端に限定する解釈を提示した。すなわち「学習=想起」を実行する主体は、僅かばかりの哲学者のみであり、想起の対象もイデアに厳しく限定されると解した。これに対して拙稿では『メノン』『パイドン』のテキストをもとに、想起は万人に可能であり、想起の対象もあらゆるものに及ぶという可能性を追求した。この結論が妥当であれば、さらに次の重要な点を示唆すると思われる。すなわち、人は好むと好まざるとに関わらず、また意識的か無意識的かを問わず、皆、想起を行っているということがプラトン自身
- の見立てであり、つまりは哲学的にも、想起説を擁護する陣営、想起説に反対する陣営に分かれるにしても、どちらの側も、何らかの形で想起説に関与しているという可能性が、プラトン自身の見解として成立しうる。実際、例えばプラトンと異なり、物質主義、経験主義に立っているとされるストア派の議論においても、プラトンに親近な認識論を暗に採用している可能性が追求されうるであろう。
- (3) アスカロンのアンティオコスの哲学について調査を行った。アンティオコスが活躍した前世紀は、哲学の舞台がアテナイからローマやアレクサンドレイアに移動していく時代であり、アテナイの学園組織的機能が失われていくことで、哲学も文献研究（とりわけプラトンとアリストテレスに対する注釈執筆）に向かっていくことになった。こうした状況下において、プラトンとアリストテレスの調和や、ストア派とプラトン哲学の融合といったようなことが進行しえたことは、歴史的、文化的背景も含めた考察によって確認される。
 - (4) プラトンの現代哲学への影響として、とくに 20 世紀の分析哲学運動がプラトンの研究動向にどう関わったかを調査した。プラトン思想を「発展」的に捉える解釈の仕方は、G・ライルをはじめとした、当時流行の分析的手法を駆使したプラトン解釈者によって強く想定され、あるいは前提された（にすぎない）ものであり、プラトン思想を「発展」的に捉えない解釈を追求する余地も十分にある。この点は、『メノン』をプラトン思想の中でどう位置づけるかにも大きく関係する。従来『メノン』は、プラトンの初期から中期思想への転換を示す作品として注目され

てきたが、もし非「発展」的な解釈をとるとすれば、いわゆる「想起説」「イデア論」なども、従来とはずいぶん異なる様相を呈しよう。少なくとも、それらの教説が中期以降の思想であるといった考え方は、大きく見直しを迫られることになる。

- (5) スクリプナーの *New Dictionary of the History of Ideas* の分担訳を担当した。この作業を軸としながら、さらに関連文献を調査することによって、現代において、「感情」「ソフィスト」という項目でそれぞれどのような哲学的意義を認めうるかについて一定の知見を得た。例えば、「感情とは何か」といった極めて現代的なトピックにおいても、依然、古代のアリストテレスによる認知的アプローチはいまなお高く評価されている。それはまた、プラトンの魂の三分をはじめとして、あくまでプラトンの認識論の影響下に生まれたと言えるものである。
- (6) この間、『メノン』の翻訳も進めた。まず一通り訳し終え、現在は推敲段階にある。『メノン』については、とくに英語圏で、近年いくつかの新訳が登場し参考になっている。例えば、Alex Long 氏訳の *Plato: Meno and Phaedo* (Cambridge Texts in the History of Philosophy) や、Adam Beresford 氏訳の *Protagoras and Meno* (Penguin Classics) などであるが、それぞれ特徴がある（前者はテキストに忠実であり、また後者は、思い切りよく現代の口語体に近づけた翻訳となっている）。読みやすさという点では、19世紀のプラトン学者 Benjamin Jowett の翻訳も依然すぐれている。その他、適宜、諸外国訳を参考にしながら、テキストそのものに忠実で、かつわかりやすい日本語の選定

に努めながら翻訳公刊にむけて準備を進めている。

- (7) その他、アウトリーチ活動等も行った。詳細は下記5.の通りである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

{書評} 大草輝政 「David Sedley ed., *The Philosophy of Antiochus*. Pp.ix+375, Cambridge UP 2012」、『西洋古典学研究』第61号、査読有、2013年、167-170頁

大草輝政、「誰が何を想起するのか—『メノン』『パイドン』を中心に」、『哲学論集』第59号、査読有、2013年、39-54頁

[学会発表](計 2件)

大草輝政、「プラトンの想起説について」、大谷哲学会(2012年度冬季研究会)、2013年2月13日、大谷大学

大草輝政、「誰が何を想起するのか—『メノン』『パイドン』を中心に」、古代哲学フォーラム(第39回例会)、2012年3月24日、京都大学

[図書](計 2件)

{共訳} 大草輝政 「感情」「ソフィスト」野家啓一ほか編『スクリプナー思想史大事典』、丸善出版、(近刊予定)

大草輝政 「プラトンと分析哲学」内山勝利編『プラトンを学ぶ人のために』、世界思想

社、2014年、243-250頁

なし

〔産業財産権〕

出願状況（計 0件）

なし

取得状況（計 0件）

なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大草 輝政（OHKUSA TERUMASA）

県立広島大学・総合教育センター・准教授

研究者番号：10552705

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者